

# なみなみ通信

福岡県水産海洋技術センター情報誌

なみなみ通信は、水産海洋技術センターからの情報を、漁業者や県民の方々にお知らせする情報誌です。

## VOL.75

発行/令和5年1月



有明海で水揚げされたアサリ

### 調査・研究情報

- 筑前海でアカモク養殖試験を開始…………… 2
- 有明海のアサリ資源が回復傾向…………… 2
- 豊前海でガザミ中間育成方法を改良…………… 3
- PCR 検査で魚病の発生を監視…………… 3

### 普及だより

- 豊前海北部漁協恒見支所青壮年部が  
令和4年度農林水産祭で内閣総理大臣賞を受賞…………… 4
- 有明海区のノリ生産者を対象に法人化セミナーを開催…………… 4
- 福岡県農林水産まつりに出展…………… 4

### 福岡県水産海洋技術センター

〒819-0165 福岡市西区今津 1141 番地 1

TEL:092-806-5251 FAX:092-806-5223

センターホームページ <http://www.sea-net.pref.fukuoka.jp/>

# 調査・研究情報

## 筑前海でアカモク養殖試験を開始

アカモクは筑前海全域に分布し、全長 10m にもなる大型の海藻です。このアカモクを湯通しし、ミンチにした商品が、道の駅や直販所、スーパーなどで販売され人気を博しています。一方、利用するアカモクは天然資源に依存しており、漁業者は、資源の減少を心配しています。そこで、県ではアカモクの養殖技術の開発に着手しました。

アカモク養殖は、12 月頃に人工種苗を漁場に設置して生長させ、4 月頃に収穫する方法で行われます。

これまでの試験の結果、ノリ網を活用した養殖方法が、種苗の生残が良く、収穫量も多くなることが分かりました。今年度からは種苗の適正な密度などを把握するための試験を開始しています。

アカモク養殖は、漁場に設置してから収穫までの管理作業が少なく、養殖期間が約 3 ヶ月と短期間であることが特徴です。今後も産地と連携して技術開発に取り組み、普及に努めていきます。



漁場で生長したアカモク

(水産海洋技術センター浅海増殖課)

## 有明海のアサリ資源が回復傾向

有明海でアサリは重要な漁業資源です。県では、アサリを増やすために覆砂による底質改善や、稚貝の確保を目的とした網袋の設置による採苗試験などを行っています。また、漁業者は、アサリを持続的に漁獲できるよう、殻長規制を遵守し、保護区の設定や土曜日休漁などの資源管理を行っています。

しかし、河口域を中心に発生していたアサリ稚貝は、河川水の影響で減少することがあります。

そこで、県と有明海漁連が連携し、河口に近い漁場に発生したアサリ稚貝を、梅雨前に河川水の影響を受けにくい漁場へと移植しました。その結果、降雨による影響が軽減され、アサリが順調に成育していることを確認しています。

これらの取組により、令和 3 年の春に 247 トンであったアサリ資源量が令和 4 年の秋には 791 トンまで回復し、今後の漁獲が期待されるようです。



河口に近い漁場での採捕状況

(有明海研究所資源増殖課)

## 豊前海でガザミ中間育成方法を改良

豊前海では、近年、100トン前後のガザミが漁獲されており、このうち特に身入りの良いものは「豊前本ガニ」として販売され、地域の重要魚種となっています。

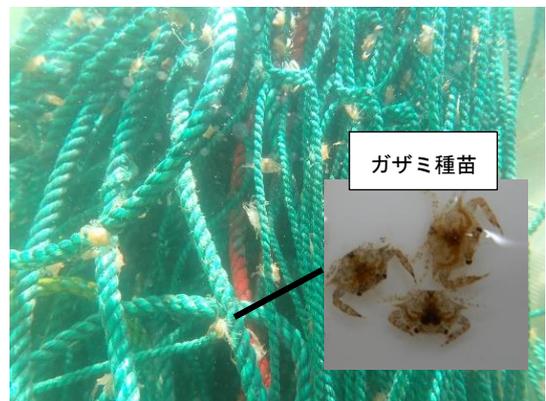
このため漁業者は、ガザミ資源を増やす取組として、抱卵ガザミの再放流や種苗の中間育成・放流を行っていますが、中間育成時の生残率を向上させることが課題となっていました。そこで、県では、漁業者とともに中間育成方法の改良に取り組みました。

中間育成では、これまでコイの採卵などに使用する人工産卵藻をガザミが付着する基質に使用していましたが、選別時に見落としが多いことや、葉状部に脚やハサミが絡まり脱落するという問題がありました。一方、(公財)ふくおか豊かな海づくり協会では、ガザミ種苗の生産時にノリ網を使用しており、今回、人工産卵藻の代替としてノリ網を用いた中間育成試験を行いました。その結果、人工産卵藻よりもノリ網の方が選別時の見落としが少なく、脚やハサミの脱落も見られないことが分かりました。また、付着面積が増えることで共食いも軽減され、生残率は昨年の29.8%から36.3%に改善されました。

今後も漁業者と連携しながら、ガザミ資源の増殖に取り組んでいきます。



ノリ網と人工産卵藻



ノリ網へのガザミ種苗付着状況

(豊前海研究所浅海増殖課)

## PCR 検査で魚病の発生を監視

新型コロナウイルス感染症の診断に用いられることからすっかり身近な言葉となった「PCR 検査」ですが、内水面研究所でも魚病の診断に活用しています。

PCR 検査とは、病気になった魚が持つわずかなウイルスや細菌の DNA を大量に増やし、短時間で感染の有無を判定するもので、魚類やエビ類の魚病診断に使われています。

当研究所では、内水面漁業にとって重要なアユやコイの病気のまん延を防止するために、定期的に PCR 検査を実施し、魚病が発生していないかを監視しています。

これにより、病気にかかっていないアユの飼育や放流、コイの養殖が可能となっています。

今後も、引き続き監視を継続し、河川や養殖場の防疫に努めていきます。



検査風景

(内水面研究所)

# 普及だより

## 豊前海北部漁協恒見支所青壮年部が 令和4年度農林水産祭で内閣総理大臣賞を受賞

11月23日に東京都で令和4年度農林水産祭式典が開催され、豊前海北部漁協恒見支所青壮年部（代表江口一弘氏）が内閣総理大臣賞を受賞しました。

当グループでは、近年深刻化しているクロダイの食害から垂下したカキ種を守るため、養殖筏からカキ種を吊すロープを束ねることで食害を大幅に軽減させる「束ね垂下」を導入しました。これにより、カキの収穫量が回復し、「豊前海一粒かき」の安定生産につながったことが評価され、今回の受賞となりました。

（豊前海研究所浅海増殖課）



内閣総理大臣賞を受賞（左が江口氏）

## 有明海区のノリ生産者を対象に法人化セミナーを開催

有明海区は全国有数のノリの産地で、関連産業も多く地域の基幹産業となっています。将来にわたりノリの産地として継続するには、担い手の確保が重要です。そのため生産者の中では、雇用確保が期待できる法人化への関心が高まっており、そうした声を受け、有明海漁連が法人化セミナーを開催しました。セミナーには、親子や夫婦、兄弟での参加がみられるなど、幅広い世代での関心の高さが伺えました。当センターでは、セミナーの設計や講師での参画など、充実したセミナーになるよう支援しました。

（水産海洋技術センター企画経営課）



法人化セミナーの様子

## 福岡県農林水産まつりに出展

11月12、13日に、第23回福岡県農林水産まつりが、FAVA大会と併せて開催されました。当センターもサザエやヒトデなどに触られるタッチングプールや、各海区を代表する魚介類を展示したミニ水族館などを出展しました。また、ステージイベントとして、サザエの殻を積み上げ、その個数を競う「サザエタワー選手権」を開催し、参加者に県産水産物を進呈するなど、県産水産物のPRにも努めました。

（水産海洋技術センター企画経営課）



タッチングプール